

M. Mussorgsky

M, ムソルグスキー

交響詩『禿山の一夜』（リムスキー＝コルサコフ編）

Night on Bald Mountain

19世紀ロシアの国民楽派を代表する「ロシア5人組」。その中でも特に民族的な作風にこだわりを持った作曲家がモデスト・ムソルグスキーであった。生前の評価はあまり芳しくなく、その孤独と苦悩に満ちた人生は42歳という若さで幕を閉じる。死後、彼のもとには日の目を見ることのなかった作品がいくつも遺されていた。『禿山の一夜』もその中の一つ。それに目を留めたのは彼の友人であり、「5人組」の一員でもあるリムスキー＝コルサコフだった。荒削りな仕上がりではあるが、このまま埋もれるには惜しい作品だ——きっとそんなふうに思ったのだろう。彼が手直しして世に発表した。これが今日知られている『禿山の一夜』であり、ムソルグスキーの非凡な才能が広く知られるきっかけにもなった。ちなみに、ムソルグスキーの曲は他の作曲家に手を加えられることが多い。たとえば組曲『展覧会の絵』もラヴェル版を始めとする編曲版が複数存在する。その驚異的なインスピレーションに惹き付けられてやまないがために、いびつな部分を修正したくなるのだろう。

キリスト教圏では毎年6月24日に「聖ヨハネ祭」という祭りが催される。ロシアの古い言い伝えでは、その前夜に闇を司る悪神チェルノボーグが禿山に現れ、手下の悪魔や魔女たちと宴を開くという。『禿山の一夜』は、そんな恐ろしい宴の様子を描いた作品だ。ムソルグスキーが遺した手紙には「私はその曲を下書きせずにいきなり総譜に書き始め、12日間で完成しました。その曲は私の中で煮えたぎっていました。自分の中に何が起きているかもほとんど分からぬままに、私は昼夜働き続けました。」とある。魔物に取り憑かれたかのように作曲を続け、完成したのは6月23日。奇しくも聖ヨハネ祭の前夜だった。ムソルグスキー本人による原典版は死後100年以上忘れ去られていた。リムスキー＝コルサコフ版との大きな違いは、静かな朝の訪れを描いた終結部分が無く一貫してお祭り騒ぎが続く点である。より一層恐怖を煽るおどろおどろしい味付けがなされているのも特徴だ。作曲技術の粗さはむしろ、刺々しく意外性に満ちた響きとなって不思議な魅力を放つ。現在では多数の録音が存在するので、本日演奏するリムスキー＝コルサコフ版と聴き比べてみてほしい。

ムソルグスキーの作る音楽は、理想化された美しさを並べたものではない。たとえ苦いものであっても、真実をこれでもかと露骨に描き出すのだ。それこそ、彼が生涯をかけて目指していたことだった。上空を飛び交う魔女たちのけたたましい笑い声が耳をつんざき、荒涼とした山の頂で魑魅魍魎が踊り狂うさまのなんと生々しいことか。その場に居合わせてしまった私たちは、おぞましさと恐怖に背筋を凍らせながらも目を離すことができない。悪魔的な魅力に取り憑かれてしまうのだった。

参考文献

ポール・グリフィス 学習研究社 (1998) 「西洋音楽史大系7 ムソルグスキー」
 岸辺成雄 平凡社 (1983) 「音楽大事典」
 フェリックス・ギラン 青土社 (1993) 「ロシアの神話」

(文責：清原桃子)